

横浜「言語と人間」研究会(編)「ことばと人間」第1号(1997) 抜刷

日本語のClauseの分析：分類基準とclauseの關係に  
焦点をあてて

An Analysis of Clauses in Japanese : Focusing on the Identifying  
Criteria and the Clause Relations

佐々木 真  
Makoto SASAKI

## 日本語のClauseの分析：分類基準とclauseの関係に 焦点をあてて

### An Analysis of Clauses in Japanese : Focusing on the Identifying Criteria and the Clause Relations

佐々木 真  
Makoto SASAKI

#### 要旨

Systemic Functional Linguistics (SFL)において、意味単位としてのtextはclauseにより具現化されると想定し、textを分析する際に構造的単位の最上位としてsentenceではなくclauseおよびclause complexを同定する。本論ではこの理論を日本語に適用し、日本語のtextにおいてclauseを同定する際にどのような問題があるのか具体例を挙げ、どのように対処すべきか、その可能性を列挙する。

#### キーワード

Systemic functional grammar · clause · clause complex

#### 1. はじめに

Systemic Functional Linguistics<sup>1)</sup>はM.A.K. Halliday (1978, 1994) を中心として、言語が社会やコミュニティの中でどのように機能しているのか探ることを目的としている。この理論では言語を何かの意味を伝える体系、すなわち‘meaning potential’ (Halliday 1994), あるいは‘system of meanings’ (Bloor and Bloor 1995) と捉え、意味を伝えるためにどのような選択があり、またその選択がどのような要因でなされるのかを研究テーマとする。Halliday (1994) はこの理論で言語構造をどの様に把握、分析するかを記述し、その英語を基盤とした枠組みは広く他の言語分析にも応用されている (Davies and Ravelli

1992, Hasan and Fries 1995)。さらにSFLでは言語機能が左右される環境, すなわち実際の言語使用における状況のコンテキスト (context of situation) と言語使用を広く規定する文化的コンテキスト (context of culture) を視野に入れている。前者はレジスター理論, 後者はジャンル理論という枠組みの中でそれぞれの構造が実際に言語構造の選択にどのように影響するのか研究がなされている (Eggins 1994, Leckie-Tarry and Birch 1995)。

それでは実際に使用される言語ははたしてどのように具現化されるのであろうか。SFLでは言語は様々な選択肢の中から適切な語句や表現が選ばれ, それがtextという形で具現化されると考える。このtextとは単にsentenceを越えたものというような構造的なものではなく, ある意味単位を指す。Textは実際に何らかのコミュニケーションの目的を達成するために書かれたりあるいは話されたりしたもので, その中であるまとまった意味をやりとりしている (Eggins 1994)。

それではこのtextそのものはどのように具現化されるのであろうか。SFLではランク (rank) という概念を使い, textはclause, group, word, morphemeという単位で構成されていて, それぞれには示す意味の単位があると想定する (Bloor and Bloor 1995)。つまりそれらは上位のものからclause, そのclauseはいくつかのgroupから成り, そのgroupはさらにいくつかのwordから, そしてそのwordはさらにいくつかのmorphemeから成立しているということである。また重文や複文のように従来sentence<sup>2)</sup>で扱っていたものについてはclauseの複合体によって構成されていることから, SFLではclause complexという概念を当てる。

本論はこの中のSFLにおいて分析の基本的単位とも言えるclause<sup>3)</sup>を日本語においてどのように同定するかを考える。英語を中心に発展しているSFL理論を日本語に適用するならばこのclauseの同定は分析の基礎をなすものであり, ここからSFL理論で設定されているclauseの果たす三つのメタ機能 (Halliday 1994) 分析は始まる<sup>4)</sup>。もちろんSFL理論で日本語の研究例は既にくつも報告されており, その結果日本語の構造的記述も発展しつつある (Teruya 1995, Thomson 1994)。しかしながら, 中にはclauseの同定やその機能分析について英語のものを直接あてはめ, 日本語構造の特殊性を考慮したとは思えないものもいくつかある。そこで本論では実際の日本語データを分析する場合, clauseの同定に関連してどのような問題が発生するかを挙げ, どのように処理するべきかを論じていく。

## 2. 英語のclause

英語のclauseを構成するものはnominal group, verbal group, prepositional group, adverbial groupと考えられる。従ってこれらの要素が並んだ場合, 特にverbal groupの存在がclause同定の鍵をにぎる。たとえば“The duke gave my aunt this teapot.”という英文ではthe duke, my aunt, this teapotのそれぞれはnominal groupであるが, それがgaveというverbal groupによって連結されることによって全体で1つのclauseとなる。また接続詞で連結されたclauseについても例えば, “If winter comes, can spring be far behind?” というものは二つのclauseとして “If winter comes, || can spring be far behind?”<sup>5)</sup>と

して二つのclauseの複合体すなわちclause complexとして取り扱う。これらは従来の伝統文法や形式主義の文法で言うclauseと大差はない。ところがSFLのclause complexではいわゆる分詞構文についても同様の扱い方をする。たとえば“Arriving at the station, I found the train had already left.”という英文は “Arriving at the station, || I found the train had already left.”という二つのclauseとして処理するが、これはこの英文が“When I arrived at the station || I found the train had already left.”と同じ意味を示すことに由来する。従来この現在分詞で表現された部分はgroupあるいは句という用語が当てられclauseという概念は適用されなかった。SFLでは意味をその分析基盤とすることから、このように形式的には異なっても意味的に同じならば同様の処理をする。

Clause complexを考える場合、しかしながら、いくつかの側面を考慮する必要がある。第一はclause complexを形成するclause同士の依存関係である。これには並置(parataxis)と従属(hypotaxis)の二つがあり、前者はclauseがそれぞれ等位関係にある場合を指し、後者はclause同士が従属関係にあるものを言う。たとえば“John didn't wait; || he ran away.”というclause complexなら、“John didn't wait”と“he ran away.”というclauseはそれぞれ独立した関係であり一方が他方に依存しなければ存在できないというものではない。ところが“John ran away, || because he was scared.”という場合は“John ran away”が主たるclause、すなわちindependent clauseであり、“because he was scared”は先行するclauseがあって初めて成立するdependent clauseである。第二にclause同士の論理意味関係である。これには 拡張(expansion)と 投影(projection)があり前者は後続のclauseが先行するclauseを言い替えや付加によりその意味を拡張するもので、後者は後続のclauseの内容(具体的に考えた内容や話した事柄)が先行するclauseによって投影されるということである。拡張の例としては“John ran away; || he didn't wait.”があり、投影の例としては“John said: || 'I'm running away.'”がある。ただし実際にはこのclauseの依存関係と論理意味関係は同時にclause同士に作用しているので、同時に考慮する必要がある。たとえば、“John said: || 'I'm running away.’”は投影の関係であると同時に並置の関係にある。ところがこれを“John said || that he was running away.”とすると投影の関係は維持するもののclauseの依存関係は従属の関係になる。

第三にclauseのfinite / non-finiteを考慮する必要がある。Finite clauseはfiniteを含むclauseで、このfiniteは時制と法を司る助動詞ならびに本動詞からなる。Non-finiteはそのfiniteがないものである。先に出した“Arriving at the station, || I found the train had already left.”と“When I arrived at the station || I found the train had already left.”というclause complexでは従属で拡張の関係であることには違いないが、一方のdependent clauseはnon-finiteであり、もう一方のdependent clauseはfiniteという違いがある。Clause complexを構成する二つ以上のclauseが全てfinite clauseである場合、これらの関係は並置か従属かどちらかの可能性があるが、どれか一つでもnon-finite clauseがあればそれは従属の関係に依存したclauseであるといえる。

最後にその他のclauseとしてembedded clauseと、included clauseがある。Embedded

clauseはいわゆる関係代名詞により埋め込まれたもので、SFLでは名詞の修飾語句として解釈するために直接clauseの分析には含まない。ただし、関係代名詞の非制限用法の場合は一種のdependent clauseとして考える。またincluded clauseは挿入されたもので例えば“*He did eventually get permission, <<however reluctantly it was given, >> from his father and partner.*”<sup>6)</sup>という英文の中の<<however reluctantly it was given, >>がそれに相当する。なお、この二つが混在すると“The mouse, <<who seemed to be a person of authority among them, >> called out.”のようなものになり、非制限用法のものが主語と動詞の間に入る場合には挿入されたclauseとして判断する。

### 3. 日本語のclause：その分析と問題点

それでは日本語のclauseはどのように同定し、さらに従属と並置などの依存関係、投影や拡張などの論理意味関係を判断するにはどのようにすればよいのであろうか。また日本語においてfinite clause / non-finite clauseの判断はどのようにすればよいのであろうか。綾野・佐々木（1997）は日本語のTheme研究を行うためにnarrativeのテキストを分析しているが、その手法はまず英語のclauseの同定の仕方をそのまま適用したものとなっており、動詞句を中心にclauseを同定している。そこで実際にこの枠組みで日本語を分析したデータから何が問題になるかを分析例を挙げながら論じていく。

#### 3.1. 異なるclauseか同じclauseか？

Clause同定の鍵を握るのは英語においても日本語においてもverbal groupである。原則としては一つの動きを示すverbal groupの存在に対して一つのclauseが同定されるので複数のverbal groupがあれば複数のclauseとして判断される。Eggins (1994: 292) では“the poor lady starts a relationship, gets married decided to go home.”というclause complexを“the poor lady starts a relationship, || gets married || decided to go home.”と三つのclauseから成立しているものと解釈する。この原則論を当てはめると次のデータのような分析になる。

- (1) 港に戻る途中で秀さんは<<「ちっくしょう残念だのう、せっかくうまいのをくわしてやろうと思ったののう」>>と、船底にへたりこんで息もたえだえの私に向かい、|| しきりにそんなことを言っていたのだ。<sup>7)</sup>

(綾野・佐々木 1997より)

ここでの問題は「向かい」を一つの動きとして解釈し、「言った」とは別の動きとして解釈していることである。確かに「向かう」にはある方向に対して体の方向を向けたり、あるいは移動する動きが示される。しかしこの場合はどうであろうか。「私」に体を向けてから「言った」のだろうか、それとも既に「私」の方角に体を向けていながら「言った」のだろうか。感覚的には「向かい」は英語の前置詞に相当するものとして、方向性を示す一種のadverbial groupとして捉え、「向かって言った」をむしろ一つのclauseとして考えたい。ところが、「向かう」は例えば「明日私は仕事でロンドンに向かいます」というclauseでは

「ロンドンに移動する」というverbal groupとなる。ある時にはadverbial group, ある時にはverbal groupという判断ではその分類基準に一貫性がないことになってしまう。

それではこのような場合どう判断すればよいのだろうか。一つの考え方としては「向かう」は単独では方向性と動きを示す自動詞として作用するが、「話す」「歩く」のように他の動詞と組み合わされると動きを表す成分は他の動詞が担い、「向かう」には方角を示す意味だけが残って一種の副詞として作用すると仮定することである。そうすれば「向かって言った」を一つのclauseとして分析することが可能となる。ただし、この仮定もさらに多くのデータで検証される必要がある。

### 3.2. Embedded clauseをどこからどこまで同定するか？

英語のembedded clauseと日本語のそれが大きく異なるのは修飾する部分が被修飾語句に先行するか、後続するかである。英語の場合には先行詞と関係代名詞という一種のマーカでembedded clauseの存在を見いだせるが、日本語の場合にはその始点と終点は容易には同定できない。次の分析例では「五時少し前に」がembedded clauseの中の「やってきた」に係るのか、あるいは「渡し」に係るのかが問題になる。

- (2) 五時少し前に [[オートバイでやってきた]] 新聞社の原稿連絡員に小さな紙封筒を渡し、|| 私はすぐ地下鉄に乗った。||| [[そろそろ帰りの通勤ラッシュがはじまりそうな]] 時間帯で、電車の中はなんだか埃くさかった。

(綾野・佐々木 1997より)

ここでは後に「通勤ラッシュがはじまりそうな時間帯」という表現があることから、前後関係として「渡し」にかかるものと判断しているが、これは[[五時少し前にオートバイでやってきた]]と分析することも可能である。この例のようにembedded clauseに先行するadverbial groupやnominal groupがそのembedded clauseの一部かあるいはmain clauseを構成するものなのか判断が難しい。Embedded clauseの始点の同定はかなり曖昧性の残る部分であり、前後のコンテキストから判断する他はまだ明確な判断基準は設定できない。

### 3.3. Finite clauseとnon-finite clauseの区別

英語ではfinite/non-finite clauseの区別はすぐにつくが、日本語の場合、いくつかclauseが続く場合、その時制や法はすべて最後のclauseが担う。したがって、例えば「私は彼女と知り合って、デートを重ねて、愛し合って、結婚を決意した。」というclause complexなら「結婚を決意した」に時制が入っているので、これがfinite clauseになりその他の「知り合って」、「デートを重ねて」、「愛し合って」はすべてnon-finite clauseになる。しかしこの論理でいくと、日本語のclause complexはそのほとんどがいくつかのnon-finite clauseと一つのfinite clauseによって形成され、しかもnon-finite clauseはdependent clauseと解釈されるので、日本語のclause 依存関係は従属的なものばかりであるという結論になる。しかし日本語のclause complexはいわゆる「て」形で構成されることが多く、たとえば、前述の例文が「私は彼女と知り合った。デートを重ねた。愛し合った。結婚を決意した。」と

いうようにfinite clauseで構成される方がかえって少なく、むしろ不自然さを招く。したがって、finite/non-finiteの区別とそれと連動するclause依存関係については英語の方式をそのまま適用することには問題があると思われ、今後このfinite/non-finiteの処理を日本語で考えるには日本語独自の方式を考える必要がある。

### 3.4. 名詞化されたものかあるいはclauseか

日本語では「～ことがある」という表現が多い。そしてこの「こと」を通常名詞化する助詞と考え、この「～こと」を含むclauseは、たとえば次のように分析する。

- (3) それはまだ秀さんが時おり酒に酔って暴れているじぶんのことだったけれど、||  
やはり[[この秀さんとロクちゃんと伊勢海老穫りに行き潮に流されて溺れそこな  
った]] ことがあるのだ。

(綾野・佐々木 1997より)

この分析では「この秀さんとロクちゃんと伊勢海老穫りに行き潮に流されて溺れそこな  
った」を「こと」にかかるembedded clauseと考えている。確かに形の上ではこのような分  
析になるのだが、もし「～ことがある」がclauseに存在する場合、絶えずそれに先行する  
clauseをembeddedとすると、日本語ではembedded clauseに意味の大部分を依存する、  
すなわちnominal groupに意味の大部分を依存して、verbal groupはそれほどの重要な意  
味を担わないと言うことができるのではないだろうか。英語においても、特に書き言葉で  
は名詞化することが普通で、その場合にはverbal groupの果たす役割よりはnominal group  
の果たす役割の方が多く、また情報の密度も高くなる (Halliday and Hasan 1989)。とこ  
ろが日本語ではこのような「～ことがある」は特に書き言葉に多くみられるものではなく、  
話し言葉でも普通に観察される表現である。このように考えると日本語とは基本的にnominal  
group依存の言語といえるのであろうか。

あるいは「～ことがある」は意味から考えていくと何か「ことがら」が存在すると言う  
よりはむしろ英語の完了形の助動詞のように「何かの経験をする」という一種の定型表現  
として解釈できないのだろうか。そうすればembedded clauseではなく、一種のindependent  
clauseとして捉え、textの構成に直接貢献していると考えられることができる。もちろんこの「～こ  
と」は直ちに「～経験」と言い替えができるので、この論をすぐにそのまま主張すること  
はできない。今後の検討課題の一つと考えられる。

## 4. まとめと展望

本論ではSFLの枠組みでの日本語分析を行う場合にどのような問題が生じるかを取り上  
げ、その対処法が考えられるものについてはそれも挙げてきた。しかしこの研究はまだそ  
の緒についたばかりで議論すべき問題が多く、データを分析する度に新たな問題に直面す  
るというのが現状である。今回取り上げた問題の他にもnominal groupとclauseの区別や、  
あるいはadverbial clauseと捉えるかclauseと捉えるか、また投影を表すclauseをどのよう  
に処理するかなど枚挙にいとまがない。しばらくはこのようなケーススタディを中心にし

て、いかなる場合にどのようにしてclauseを同定するかといった事例を数多く作成し、その事例に共通する事象を抽出して積み上げるより他にこの研究を着実に進める方策はないと思われる。

Clauseの同定はSFL理論分析の枠組みにおいてその基盤をなすものであるが、この考え方は英語を中心として発展したものであり、日本語にそのまま適用することができるかどうかはまだ疑問の余地がある。しかし日本語の特性ということで独自の考え方を性急に押し進めるよりもむしろ英語での枠組みをまずは当てはめ、そこに何らかの矛盾点、整合性のない場合を集約してから、日本語の独自性を鑑みてSFL理論の修正を加えても遅くはない。またこのclauseの同定は日本語における3つのメタ機能の構造(本論巻末註4を参照のこと)の問題を解明する出発点となる。したがって、この基礎的なclause研究は幾多の試行錯誤を重ねて時間がかかってとしても、着実に整備されるべきものとして今後も取り組まれるべきであろう。

#### 註

- 1) 日本語では「体系機能言語学」、「選択体系機能言語学」あるいは「機能言語学」などの訳が使用されており定着化したものはない。したがって本論ではあえて日本語訳は使用せず英語のまま表記し、以後SFLと表記する。
- 2) SFLではsentenceという用語は書き言葉におけるピリオドからピリオドまでの単位に対してのみ使用される。
- 3) 本論では一貫してclauseの語を使用する。あえて「節」という用語を使用しないのはSFLでいうclauseは従来「句」という用語で示されている意味単位をも含むものだからである。
- 4) すなわち内容・命題を表現する観念的メタ機能 (ideational metafunction), 社会的役割を表現する対人的メタ機能 (interpersonal metafunction), 場面・脈絡に適合したテキストを形成するテキスト的メタ機能 (textual metafunction) である。Halliday (1994) によれば, clauseはこれらのメタ機能が同時に働くことで, その「意味」を伝える。
- 5) SFLの記述ではclauseとclauseの境, すなわちclause boundaryは「||」という2本の縦線で示される。またsentenceとして独立しているclauseとclauseについてはその境が「|||」という3本の縦線で示される。
- 6) SFLの記述ではembedded clauseは普通[[ ]]で囲み, included clauseは<< >>で囲むのが通例である。
- 7) 本論の分析例で使用する記号とその意味は次の通り。  
|| clause boundary  
<< >> included clause  
[[ ]] embedded clause  
||| sentence boundary



## 参考文献

- 綾野誠紀・佐々木真. 1997 (in press). 「日本語のナラティブにおけるThemeに関する試論」, 『機能言語学会ワーキングペーパー』 vol.1
- Bloor, Thomas. and Meriel Bloor.1995. The Functional Analysis of English. London : Edward Arnold
- Davies, Martin and Lousise Ravelli. 1992. Advances in Systemic Linguistics. London : Pinter
- Eggins, Suzanne. 1994. An Introduction to Systemic Functional Linguistics. London : Pinter
- Halliday, Michael.A.K. 1978. Language as social semiotic. London : Edward Arnold
- …, 1994. An Introduction to Functional Grammar. 2nd edition, London : Edward Arnold
- Halliday, Michael.A.K and Ruqaiya Hasan. 1989. Language, Context and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective. Oxford : Oxford University Press
- Hasan, Ruqaiya and Peter Fries eds. 1995. On Subject and Theme: A discourse Functional Perspective, Amsterdam : John Benjamins
- Leckie-Tarry, Helen and David Birch. 1995. Language and Context. London : Pinter
- Sasaki, Makoto.. 1996. “An Analysis of Realization of Theme in Japanese.” The Faculty Journal of Aichi Gakuin Junior College 4 : 82-99
- Teruya, Kazuhito. 1995. “The grammar of saying in Japanese.” 1995年度機能言語学会秋期大会における発表
- Thomson, Elizabeth. 1994. “Testing for theme in Japanese.” 1994年度機能言語学会秋期大会における発表

(愛知学院短期大学)